

ニュース

第2回ドイツ「ミツバチ生産物と アピセラピー」会議開催

ドイツ・アピセラピー協会が主催する標記の会議に参加したので、概要を報告する。同会議は2003年3月27日～29日、昨年に引き続いて、ドイツ、オーストリア国境に近いパッソウ市で開催された。日本アピセラピー協会の一行13名（内藤博文団長）が参加されたので、ミュンヘンのホテルで合流し、その後、会議の終了近くまで同行した。

会議の規模は30か国から150人余りという小規模な会議だが、主催者であるスタンガシュー博士（ドイツ・アピセラピー協会会長）の配慮で、日本語を含む4つの同時通訳ブースが組み立てられていた。講演会場の隣室がアピエクスポ会場となっていて、10軒ほどが出展していた。日本アピセラピー協会も店を出して日本の蜂針療法（針をピンセットで取り出して施療）の実演もされており、常時賑わっていた。

2日間にわたって、花粉、蜂毒療法、ハチミツ、プロポリス、ローヤルゼリーに関して、それぞれ数題の発表があった。筆者は、日本のプロポリス市場と研究の現況について報告した。その他、臨床に関わるセッションがあり、また、会議に引き続いて、実技を中心とするアピセラピー・ワークショップも企画されていた。

主催のスタンガシュー博士は、来年はドイツにとどまらない国際会議にしたいと、ますます張り切っておられた。（松香）

韓日合同応用動物昆虫学会議の開催

2003年5月28・29の両日、韓国・釜山の近代的ホテル海雲台で標記の会議が開催された。これは、韓国側学会の申し入れを受けて、初の合同会議となったもので、昨年まで日本応用動物昆虫学会の副会長の要職を務められ、今回のプログラム委員長でもあった玉川大学・佐々木正己教授と同行した。中国・台湾などに

吹き荒れるSARSの影響を受けて、何名かの辞退者もおられたが、会議は友好的、かつ盛大に行われ、短いが充実した2日間であった。

玉川大学からは、佐々木教授の北欧のマルハナバチ、ポスターで韓国のミツバチのDNA解析の発表があった。筆者もこの機会にアピセラピーの概念を紹介しようと、韓国農業科学技術院のSeol博士と組んで「昆虫資源の利活用」というシンポジウムを企画し、「健康食品としてのミツバチ生産物」と題して発表した。

ミツバチ関係、また広く昆虫学関係者との交流ができ、収穫の多い会議であった。（松香）

「マルハナバチの飼育方法」が特許に

トマトに代表される施設栽培作物のポリネーターとして注目されているマルハナバチの飼育方法は、多くの研究者により創意工夫が施され改良が重ねられてきた。本研究施設でも、1980年代より主に日本在来種のオオマルハナバチ類、トラマルハナバチ類の効率的な飼育方法の開発に力を入れて取り組んできた。1994年4月に（株）トーマンと共同出願した飼育方法が、特許として確定し、本年4月18日に特許原簿に登録された。本研究施設関連の特許としては、1974年の「ミツバチ雄蜂児によるテントウムシの累代飼育法」以来2件目。

編集後記 一年間留守中編集を担当していただき、刊行の遅れを取り戻していただいた吉田教授には申し訳ないことに、編集に復帰した最初の号から刊行が遅れて大変忸怩たる思いがしている。読者の方にも迷惑をおかけして申し訳ない。できるだけ早く本来のペースに戻れるようにしたい。さて、今号から、三重大学松浦誠教授の新連載が始まった。資料的価値の高い記事で、5回の連載終了後、合本として冊子体として利用いただけるようにと考えている。プロポリスの研究の盛んなヨーロッパから2報を掲載した。最初の論文の第2著者のBankova博士は今秋来日の予定。もうひとつは今夏の国際生薬学会の大会長によるもの。実際に女王蜂の輸入が困難な状態を招いているハチノスムクゲケシキスイ問題は急速とりまとめることになった。状況は流動的だと思うが、必要な情報はできる限り探して本誌なり、ウェブサイトに加掲載するようにしたい。読者の方々からの情報提供もいただければありがたい。（純）